鈴木信太郎全集

第二卷

編集委員
平井啓之
松室三郎
渡邊一民
鈴木道彦

鈴木信太郎全集

第二卷

大修館書店刊

鈴木信太郎全集　第二卷　譯詩 II

發　行　昭和四十七年八月二十日
定　價　六千圓
著　者　鈴木信太郎
發行者　井上　堅
印刷者　白井倉之助
製本者　牧　經雄
發行所　東京都千代田區神田錦町三ノ二四
株式會社　大修館書店

3398-150120-4305
© Suzuki 1972

凡例

一、本全集では鈴木信太郎の譯詩はすべて第一卷、第二卷に收錄されている。この『譯詩Ⅱ』には、マラルメ以後現代にいたるまでのフランスの詩作品に關する譯詩を收めた。ただし、共譯となっている譯詩は、純粹に鈴木信太郎の作品と見做しえないので、これを割愛した。

一、譯詩集は二部から構成される。第一部は、詩集というかたちをとって發表されたもので、それぞれの原詩集の發行年代順にならべられ、第二部は、獨立した詩篇として發表されたもので、原作者別に統合して配列され、その順序は原作者の生年順となっている。

一、譯詩につけられた註解は、脚註、後註ともすべて決定稿のまま收錄した。なお、いく篇かの詩篇については決定稿にもいっさいの註解が附せられていなかったが、こうした場合、原語による題名のみは編者が脚註として書きくわえた。その場合には（編者）と記してある。

一、著者が各譯詩集につけた後記、詩人解題のたぐいは、原則として決定稿と見做しうるテクストにつけられたものを各譯詩集の卷末、もしくは各詩篇に關する編者註のなかに收めた。この場合、本全集第三卷、第四卷收錄のエッセーと重複することもあるが、著者の原詩集あるいは原詩篇にたいする姿勢、ないしその譯詩の意義をあきらかにするため必要と考えたからである。

一、テクストとしては、以下の版本が用いられている。

『マラルメ詩集』 岩波文庫、昭和三十八年。

マラルメ『綺語詩篇』（『世界文學大系第四十三卷、マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボオ』所收） 筑摩書房、昭和三十七年。

『ヴェルレーヌ詩集』（『世界文學大系第四十三卷、マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボオ』所收） 筑摩書房、昭和三十七年。

ピエエル・ルイス『ビリチスの歌』 角川文庫、昭和三十七年。

『ヴァレリイ詩集』 岩波書店、昭和四十三年。

『鈴木信太郎譯詩集』下卷 白水社、昭和二十八年。

以上の底本に收錄されていない諸詩篇については、それぞれの底本が編者註に記されている。また疑義のある箇所は底本以外のテクストをも參照した。

一、版本による譯文の異動についてはこれにいちいち觸れなかったが、それぞれの詩集、あるいは詩篇が、決定稿として完成されるまで、どのような經過をたどったかについては、卷末の編者註でいちおう略述した。

一、この譯詩集における假名づかいはすべて決定稿にしたがった。ただし外來語表記について、同一詩集內で統一のない場合、他との關連からいちおうの統一をおこなった。

一、編者註のある章句については、これを＊で示した。

鈴木信太郎全集
第二巻　譯詩Ⅱ

目次

マラルメ詩集……一
ソンネ篇……七三
『マラルメ詩集』註……一〇一
『マラルメ詩集』後記……一五一
綺語詩篇
ステファヌ・マラルメ……一五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヴェルレエヌ詩集……一八九
サテュルニアン詩集……一九一
女の友達……二一一
艶なる讒樂……二一七
よき歌……二三五
言葉なき戀歌……二四一
叡智……二五五
昔とちか頃……二六三
愛の詩集……二七三
雙心詩集……二七九
女に獻ぐる歌……二九一
エピグラム……二九九
『ヴェルレエヌ詩集』後記……三〇七
ビリチスの歌　ピエエル・ルイス……三〇九
第一部　パンフィリイの牧歌……三二五

第二部　ミチレーヌの悲歌……三七一
第三部　キプル島の短詩……四二一
ビリチスの墓……四七七
『ビリチスの歌』後記……四八三
ヴァレリー詩集……四八五
舊詩帖……四八七
若きパルク……五三九
魅　惑（卽ち詩篇）……五七九
『ヴァレリー詩集』註……六八九
『ヴァレリー詩集』後記……七六三
詞華集Ⅱ……七六七
『鈴木信太郎譯詩集』後記……八六五
編者註……渡邊一民……八七一
編者あとがき……渡邊一民……八九五
詩篇總目次……九〇一

マラルメ詩集.

LES POÉSIES

DE

S. MALLARMÉ

禮[1]

虚し、この泡沫、處女なる詩、
ただ　酒盞を示すのみ。
群居る人魚の、眼路はるか、
躍り亂れて、沈み行くごと。

船出して、おお　もろもろの
友よ、われ　はや艫にあり、
君　氣も驕り　舳に立ちて、
雷と眞冬なす浪　掻き分けて。

醉　艶だちて　おのづから
蹣跚と、船のたゆたひ憚らず、
やをらわれ立ち　この禮を獻げむ、

寂寥、暗礁、北極星、

わが船の帆の素白なる
惱みを　與へし　悉皆ものに。

不遇の魔

人間といふ家畜どもの喫驚してゐる群の上を、
足をわれらの路に踏へ、蒼空を欣求する徒が
野性の鬣を振り紊し　光の中に跳び躍ねてゐた。

その途上には　眞黑な風が翼を　旗のやうに張り展げ
彼等の歩行を　寒冷で肉にも徹れと鞭打つて、
苛立ち易い轍を　また　肉の中にも穿りつけてゐた。

絶えずいつも　海に出會ふ希望を抱いて、
彼等は旅を續けてゐた、麵麭も無く、杖なく、壺なく、
苦い理想の金色の香橙を　嚙みしめながら。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼等の多くは　夜な夜なの隘路[2]の中に、自己の血が
流れるのを見る幸福に　醉ひ癡れながら、苦しく喘いだ、
おお死よ、彼等の物言はぬ口に與へる唯一の接吻。

彼等が敗れ去るとしたら、拔身の劒を提げて
地平線上に立ちはだかる金剛力の天使[3]のためだ。
緋の色の血が　感謝に燃えた胸の中で凝結するのだ。

彼等は　夢を啜つてゐた如くに　今や苦痛を啜る。
そして肉慾を擽る涙を　律動に乘せて歌へば、
大衆は脆坐して敬ひ、彼等の母は立ち上る。

かういふ詩人は慰藉を得て、信頼されて、威嚴がある。
然し、彼等の足元には　愚弄の的の百人の兄弟共を引連れてゐる、
曲り拗つた運勢の　嘲笑される殉教の使徒だ。

柔らかな彼等の頰を　涙の辛い鹽が蝕み、
彼等は同じ愛情を抱いて　灰の塊を食ふ、それなのに
卑俗或は滑稽だ、運命が彼等を車裂きにするとは。

聲に生氣を失つた民衆の　卑屈な憐憫の情を
彼等は、恰も太鼓のやうに、打ち鳴らし得たかも知れぬ、
禿鷹の苛責を缺いたプロメテウスの儕輩[4]たち。

否然らず、身は下賤、貯水池もない曠野に出入し、
癇癪持の帝王の不遇の魔の笞の下に　馳け廻り、
前代未聞のその哄笑が　彼等を跪坐かせるのだ。

戀人たちと並んで、馬の尻に乘る、三人掛の餘計者[5]、
やがて早瀬を渡る時、泥沼の中に忽ち投げ込んで、
あぷあぷ泳ぐ眞白な泥濘夫婦の塊を殘す。

若し戀人の男の方が　奇妙な喇叭を吹奏すると、
魔物の煽てに乘る小僧共は、お尻の穴に拳固をあてて、
喇叭の音の猿眞似をして、世間を執拗く笑はせるだらう。

若し戀人の女の方が[6]　萎んだ胸を一輪の薔薇で巧みに
飾つて　薔薇が瑞々しく胸の炎を燃え上らせると、

魔物が邪魔して、呪はれた花束の上には　涎が光るだらう。

そして　この侏儒の骸骨は、羽根飾の附いた帽子を冠り、
長靴を履き、腋窩には本物の腋毛に　蛭や蚯蚓を生やす、
この骸骨が　彼等にとつて　廣漠とした苦惱の無限だ。

窘られても　この惡人に彼等は挑み掛らうとしないが、彼等の
長劍は軋んで鳴つて　月光の軌跡を追つて、その
光芒は　惡人の骸骨に雪を降らせて　斜めに横切る。

薄命を神聖化する自負心もなく　ただ懊惱して、
その骨を嘴でつつかれたのに復讐をするのも　物憂く、
遺恨の代りに、彼等は　憎惡を渇望するばかり。

彼等は三絃胡弓を彈く藝人の慰みものであり、
小兒や、娼婦や、また　酒壺に酒がない時
踊を踊る襤褸を著た年寄りの奴等の玩弄物である。

布施を受けるにも復讐をするにも適つた詩人たちは、

これら抹殺された神々の　不幸を一向知ることなく、
退屈極まる　知慧のない奴等である　と彼等を言ふ。

『奴等にしても、装甲して戦場に疾驅しようと勇み立つ
馬より寧ろ　若駒が暴風雨によつて泡立つ汗を流すやうに、
力に應じ充分な手柄を立てて　遁れ去ることを得るのだ。

我々は　その勝利者を、祝宴で　香を燻き込めて陶酔させる。
然るに奴等、この道化役者共は　何故に　吠えついて人を
立留らせるやうな　猩々緋の襤褸切れを擔いでは歩かないのか。』

奴等の面に　人がみな侮辱の唾を吐きかけた時、
髯の中でもぐもぐと雷を念じながら、三文の値打もない
これらの英雄たちは、人を小馬鹿にした不安に疲勞
困憊して、滑稽にも　街燈に首を縊りに行く。(8)

あらはれ[1]

月魂は悲しかりけり。熾天使は涙に濡れて、
指に樂弓、朧にけぶる花々の靜寂の中を
夢みつつ、花瓣の蒼空の上を渡りゆく
眞白き啼泣　音も絶え絶えの胡琴に　ゆし按じたり。
――この日こそ、君が初穂の接吻に祝福されし日。
わが身を贄に獻げたる苦行を好む冥想は、
夢の果實の收穫の、夢を摘みたる魂に、
恨もあらず悔もなく　殘す悲哀の芳香に、
賢しく醉ひて、醉ひ凝れゐたり。
されば、年經し甃路に　眼を伏せて行き迷ひ、
迷ひて行けば、夕闇に　街の眞中に、微笑みて、
たわわの髪も燦々と、あらはれ出でし　この君に、
人に驕えし少年の美しき夢路に　その昔
光の冠をいただきて、掌　緩かに握りたる

御手より零るる　香も高き星の素白き花束の
雪降らしつつ過ぎ行きし　妖女を見しと、われは思ひぬ。

徒な願ひ[1]*

あなたの脣の接吻で　この陶盞に浮び出る童女
エベの幸運を　嫉んで　私は、公爵夫人よ、情熱を
燃し盡すが、ただ一介の法師ほどの儚い身分の詩人だから、
裸になつても、セーヴル燒陶器の上に描かれまい。

鬚のあるあなたの狆でも、ボンボンでも臙脂白粉でも、
また　しやれた將棋の駒でも　私はないから、更にまた
閉ぢたあなたの眼が　私に注がれるのを知つてゐるから、
神にもまがふ髮結は　珠玉細工師である　金髮美女よ、

私達を名付けて下さい……木苺の薫の高い笑ひ聲が、
慕ひ寄る人の懇願を喰ひちらし　恍惚として啼き喚き、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com